

釧路湿原自然再生協議会再生普及小委員会

環境教育ワーキンググループ(第1回)

議事要旨

平成 19 年 8 月 21 日 (火) 15:00~17:00

釧路地方合同庁舎 5 階 共用第 1 会議室

【出席者(敬称略)】

環境教育ワーキンググループ構成メンバー

<個人(所属)>

- ・ 大森享(北海道教育大学釧路校 准教授)
- ・ 高橋忠一(北海道教育大学釧路校 准教授)
- ・ 鶴間秀典
- ・ 松本文雄

<団体(出席者)>

- ・ 阿寒国際ツルセンター(太田幸)
- ・ 釧路市民活動センターわっと(成ヶ澤茂)
- ・ NPO 法人 環境把握推進ネットワーク - PEG - (照井滋晴)

<教育行政関係機関(出席者)>

- ・ 北海道教育庁釧路教育局社会教育指導班(岩崎撰也)
- ・ 釧路市教育委員会指導主事室(田中君枝)
- ・ 鶴居村教育委員会管理課学校教育係(佐藤直人)

<関係行政機関(出席者)>

- ・ 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所(北沢克巳)
- ・ 国土交通省北海道開発局釧路開発建設部治水課(吉村俊彦)
- ・ 林野庁北海道森林管理局釧路湿原森林環境保全ふれあいセンター(中島章文)
- ・ 釧路市《釧路国際ウェットランドセンター、釧路湿原国立公園連絡協議会》
(福田芳弘)

環境教育ワーキンググループ事務局

- ・ 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所(川淵義昭、露木歩美)
- ・ 財団法人北海道環境財団(久保田学、山本泰志、内田しのぶ)

【議事概要】

事務局 第1回環境教育ワーキンググループ(以下「環境教育WGと表記」)を開催する。事務局を代表して、環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所 所長北沢よりご挨拶申し上げます。

自然環境事務所長 7月から環境省釧路自然環境事務所長を拝命しました北沢と申します。前任は環境省の環境教育推進室と民間活動支援室の2つの室長を兼務させていただいていた。これまでの経験もいかしまして参加させていただくことに大変感謝申し上げます。本ワーキングはご存知のとおり、釧路の自然再生の一環として再生普及小委員会のもとに新たに設けられるもの。これまでの様々なご議論や活動を踏まえて今後どのように展開していくかということで、湿原への理解、愛着、自発的な活動・行動につなげていくためのワーキンググループと理解している。釧路湿原の環境教育については、湿原を学ぶということにとどまらず、湿原を感じ、学び、行動していくということが目標となる。自然と人、人と人がつながっていくことが重要であり、それらを踏まえて我々も心が豊かになっていくということが再生事業の大きなテーマになると考えている。そういった意味でも皆様の忌憚のないご議論、積極的な参画をお願いしたい。

(資料確認後、参加者の自己紹介を行う。)

座長選出

事務局 本ワーキングの座長として高橋委員を推薦したい。(委員の拍手を持って承認)
(以下、高橋座長による進行。)

座長 よろしく申し上げます。ワーキングの運営にあたって、座長を補佐する委員として副座長をあらかじめ決定したいかがか。(異議なしの声あり)

座長 新庄委員を副座長としたいかがか。(異議なしの声あり)
新庄委員に副座長をお願いすることとする。

議事1 環境教育ワーキンググループの活動について

座長 今回は第1回目の立ち上げのワーキングとなる。これまでの経過として資料1について事務局からの説明を求める。

事務局 (資料1に沿って説明)

座長 環境教育WGのこれからの方針を検討し、その後に調査内容の検討に入りたい。
第1回の環境教育ワーキンググループを立ち上げるにあたってのこれまでの経緯が参考資料に記載してある。参考資料について事務局からの説明を求める。

事務局 (参考資料に沿って説明)旧環境教育ワーキンググループにて作成した小中学校向けテキスト、人材バンク「プログラムリスト」の資料は回覧資料として数部用意しているのでご覧いただきたい。

座長 これまでにあった環境教育ワーキンググループは小中学校向けのテキスト、人材バンクリストを作成するという目的を持ったワーキングであり、これらの完成配布の時点で休止となっていた。それをどのように活用するか、普及していくかという第2ステップにこれからは入るということである。事務局より説明があったように、こうした経緯から本ワーキングの立ち上げに至った。立ち上げにあたっては、学校教育の中での環境教育と一般の市民を対象とした環境教育という2つの意見があった。ワンダグリンドプロジェクトは3年目であり、10の提言に沿った活動にある一般市民を対象とした活動は、この中である程度沿っていると捉えることができる。今回のワーキングでは、スタートとしては、学校教育の中での環境教育に絞ってということを進めていきたいということまで話が進んでいる。今回、学校教育、自然再生に関係した機関や個人の皆さんに集まっていた。今後の本ワーキングの活動としては、学校教育における環境教育の実態、今後の学校としての意向などを把握していこうということを考えており、これらが資料1にまとめられている。活動方針に関してフリートワーキングにて皆さんよりご意見をいただきたい。教育局の立場よりご意見いただきたい。

委員 それぞれの学校にて環境教育の取り組みが行われている。学校教育については、学習指導要領や北海道の指針に基づいて行っている。教育局として押し付ける形で進めることは難しい状況である。環境教育ワーキンググループの活動について、学校教育に対して、こうした形で環境教育を広げることができるということまで捉えていることは良い視点である。こういった可能性もあるという視点から進めることで、今後の可能性が広がる。

座長 釧路地方の学校教育だから釧路湿原を題材とする環境教育を、他の地区に先駆けて進めていくなどは、現状は局としては難しい状況などはあるか。

委員 釧路湿原に特化して推奨することは難しい。題材として学校独自の判断で湿原を取り上げることは可能であり、そうした学校もある。教育局としてとなると難しい。

委員 釧路市では全小中学校で学校版ISOを平成18年度より推進している。各学校がどのように進めるかといった計画と、実施結果を、教育委員会に年度当初に報告を上げていただいている。総括として市長から1~2校を認定している。総合的な学習では、こういった素材を扱うかは学校ごとの裁量であり、全校で実施していくことはなかなか難しい状況にある。釧路市には釧路湿原と阿寒といった2つの国立公園があり、音別にも湿原がある。身近な環境の中に素材を求めて環境教育を行っている学校もあるにはある。

座長 鶴居での状況はどうか。

委員 教育委員会としては、統一して環境教育を推進している状況にはない。各学校において、総合的な学習の時間を利用して釧路湿原に係る勉強にも積極的に取り組んでいる。特殊課題の活動では、校庭等に、におを設置し、タンチョウへの給餌活動を行うなど地域の自然環境からの学習にも積極的に取り組んでいる。これらは総合的な学習の時間と社会科の時間で行われることが多い。また、郷土学習の副読本を作成しており、地域の自然資源を学ぶ教育にも取り組んでいる。

座長 小学校での具体的な環境教育の状況はどうか。

委員 今年の3月に国立教育政策研究所教育課程研究センターから環境教育指導資料が出た。1991年に環境教育指導資料として文部省が出した改訂版。以前の指導資料に比べて、総合的な学習の時間の実践が入ってきて多少内容が豊かになってきた。ぜひ、本ワーキングで活用いただきたい。理論編と実践編があるが、実践編にもう少し良い事例があるのではないかと思う。環境教育はローカルのな、今ここにある身近な素材を使ってという側面が強く、様々な事例を掲載すべき。理念的、理論的なことは共通理解できるが、いかに子供たちの発達段階に沿って具体化するかが重要であり、具体化する場がこのワーキングであると考えている。このワーキングでも、環境教育指導資料を活用いただきたい

座長 事務局にて次回のワーキングで用意されたい。具体的に環境教育は地域性を出していかなくてはならない。北海道の事例などは環境教育指導資料には掲載されていないのか。

委員 あまり北海道の事例は掲載されておらず、自然豊かな場所の事例は少ない。

座長 少し自然から離れた方が、意識が高いという面もあるのか。北海道教育大学釧路校の学生の半分以上は本州などからくるが、一番湿原に触れていないのは地元出身の学生。小学校では遠足で湿原に連れて行かれるなどの体験もあるが断片的なもので、継続的なものを知らされていない。受けていても当人が受け止めていない。道外から来た学生のほうが自分で釧路を選んでいるためか、むしろ地元の学生よりフットワークが軽い印象がある。教育に携わる方から説明いただいたが、ほかのご意見はいかがか。

委員 釧路川会議を昨年開催した。国土交通省主催の川会議、川の日ワークショップがあり、全国大会に参加してきた。小学校と高校生のパワーがすごい。ある地域の環境に関する未来像を子供達が描き、大人が子供達の絵に合わせて環境を作っていく。学校と地域、グループがまとまって行うことで良い教育が実施できる。北海道では、拓北高校がピオトープをテーマに全国でグランプリをとった。中学生も参加し、ピオトープだけでなくトラストも行うようになり活動が大きくなっている。田舎の学校では大学生、地域の人が連携して良い活動をしている。何か1つのことに集中してやればできる。

座長 学校教育だけで閉ざされた形ではなく、地域で連携しあうということが望ましいというお考えで理解してよいか。

委員 釧路の魚を知る子供サミットをやりたいと考えている。釧路市内の小学校 5 年生を対象として、各地域に生息する魚を知り、湿原の再生事業、シャケの孵化場、定置網などを見学するとともに、漁協の協力のもとで、釧路で捕れた魚を食べてもらう。湿原に含めてこうしたひとつのアクションをおこしたいと考えている。

委員 阿寒国際ツルセンターでは、学校からの依頼は年に数校ある。湿原に住むタンチョウについて学びたいということでの訪問。タンチョウにとって必要な環境とはという視点から湿原の大切さを伝え、穴の開いた空き缶を見せながらゴミ捨てに関するマナーを伝えるなど、実物を見て感じてもらう教育を行っている。釧路管内の小中高校の校長へ活動案内を出したが、全く反応はない。今のところ数校。阿寒という場所で学校から距離が遠く、予算面でも難しいところがあり、そういうところまで目がいかない。子ども達に教え、啓発して行ってほしいという思いが強いが、先生には伝わらない状況にある。学校の訪問は、郊外学習で数グループでの来訪、先生が引率して学年単位でくるもの、修学旅行でくるものなどある。阿寒で生まれ、釧路で育ったが、身近な環境であるがゆえに、そうしたことに自分自身関心がなかった。タンチョウがいるのは知っていても、どんなに大切に守っていかなくてはならないかまでは理解していない。そうしたプログラムもなく、学校教育の中でもなかったと思う。

委員 地元にいれば、身近すぎて関心がないものかもしれない。知ってはいても関心がない。そうした接点を増やしていくことが必要なのではないか。

座長 ふれあいセンターではどのような形で接点があるか。

委員 出前森林教室という形で学校に伺い、校庭の樹木などを使って親しんでもらうことがテーマ。現状は年間 20 学校くらい。先生たちの口コミなどにより、徐々に増えつつある。実際の森林に行き、体験学習をしたり樹木に触れたりをしていただけたらと思うが、市内より 1 時間ほどかかるので交通費や授業時間の関係からなかなか現地にはいけない状況。こうしたことから、学校に行き授業をしている。

座長 私たちは学校教育での現状を知らない状況にあり、アンケート調査という形で意向や現状を把握しなければと思う。あるいは、地域の活動団体や行政の支援の方策を検討、考え出すことで、やってみようと思う学校が増えていくのではと考えている。議会ではこういった話はあるか？

委員 行政的な問題もあり、議会において、なかなか環境教育の議論は深くはならない。

座長 以前の環境教育ワーキンググループで作成したテキストなどは釧路市内の全生徒に配布しているのか。

委員 児童の人数分は配布していない。既の実施している学校には配布しているが、それ以外には10部づつ程度の配布。

座長 手元にはないくらい現在は配りきっているが反応がない。人材バンクへの問い合わせは年に2回くらいとのこと。学校関係に配布しても反応が薄すぎる。いろいろな問題があり、どうした課題があるのかを考えていきたい。資料1の案にあるように、小中学校が中心になると思うが、学校内の状況、外部との連携などアンケート調査を行い、その後に検討材料として議論していきたい。こうした進め方で異論がなければこのように進めていきたいがいかがか。(異議なし)

座長 資料1の裏面に調査対象が記載されている。これらに対する調査を進めるということではどうか。関係行政機関などにも同様の調査を行うのか。

事務局 資料2の中で分けており、その中で説明させていただきたい。

議事2 アンケート調査の実施について

座長 具体的な調査の中身として資料2をご覧いただきたい。学校用と協議会構成員用に分かれている。これについて事務局からの説明を求める。

事務局 学校用と協議会構成員用の2種に分けさせていただいている。(資料2に沿って概要を説明)

座長 学校用と協議会構成員用にそれぞれ説明いただいた。言葉や中身など、ご意見いただきたい。盛りだくさんな内容との印象を受けるが。

委員 分量については、多いとは思う。だめならだめで、書かないところは書かないということか。分量を少なくしても、書かないところは同様に書かないだろう。

座長 この分量でどの程度回答してくれるかを期待したい。言葉について、やわらかいものが個人的には好むが、くだけていても学校に対しては難しいかと思う。こうしたことでもいいので、感想などいただきたい。

委員 アンケートを実施する場合、児童生徒と親との関係を知りたい。以前に、団体の活動案内を学校での配布依頼にまわったが、学校側では配布イベントに対して責任を持たなければいけないと、どこに行っても言われた。学校は親の目をかなり気にしている。学校と団体だけの問題だけでなく、親との関係が重要になってくる。このアンケート内では言わないが、学校に対して親がどう思っているのか、実際に親にも取れたらよいと思うし、とっていただきたい。教育大を卒業しており先生との接点があるが、釧路に限らず、どここの学校でも案内を配布することは難しいと先生達も言っておられ、今後はPTAなどと学校と協力していかなくてはいけない。

委員 学校は基本的に用心深い。学校からの配布物は学校長の責任となる。団体と学校との信頼関係がなければ難しい。文部省が学校を開くということで地域との連携をいっているが、地域に簡単に開くと安全管理をどうするかといった矛盾もあり、これからの課題。今の学校教育を見てみると、認識の視覚部分のみに特化しており五感を使わない。虫捕りや釣り、泳ぐといった作用もほとんどない。また社会的に地域の自然に関わる文化がない。今までの近代の学校教育の中で非常に特化した視覚・記号・言葉での認識を促すということではなく、五感や体験、社会性を通じて、より豊かにするという切り口が環境教育にはあるはず。アンケートを通じて表面的な分析も大事だが、わかり方を問い直すという分析視点が必要。自分の行動がどのような影響を及ぼすか、より深い理解を促すということが問題になっている。知のあり方、現代の知を見直す、問い直すという観点が環境教育の中にはあると考えている。

座長 本質的な内容にまで踏み込むと、いろいろな問題がある。現在の流行の環境教育という言葉で世の中に広まっているものが必ずしも決定版ではなく、より深さが必要となることは予測できる。五感を使う、全身を使うということを目指していくということ。また、これらは危険がつきものであり、それに伴う責任を恐れるということも垣間見ることができる。それらに対するサポート、安心感、覚悟なども実施側に与えていくことが必要になってくる。PTAの視点を1項目入れるということは可能だろうか。学校が親の視点が制約のひとつであるなら入れることもありうるであろうか。

委員 学校が親をどうみているかということと、親が実際にどう思っているのかの両方についてだと思うが、学校が親をどうみてるかを記載しても、本音を書くであろうか。

委員 実際は難しいと思うが、どんな些細なことでも聞けると良い。

座長 オフィシャルな立場からはなかなか言えないのではないかと。興味深い指摘であるが、本調査に入れるのは少し難しいか。それをご理解いただけるか。

委員 了解した。

座長 どのくらい回答があるかということもあるが、回答への期待も含めて実施してみようということに進めたいが、いかがか。

委員 やってみた反応をみるのもいいのではないかと。

委員 4 - 2の可能性について、ワーキングとしてそうした方針なのか。作業部会がいきなり登場しているが。

座長 可能性としてはあるということ。そうしたことを先々考えたいということであろう。

委員 それぞれの取り組みごとに作業部会を作っていくことを前提に考えているのか。また、ワーキングで授業のプログラム作りまでやっていくのかという2つの点で質問したい。組織のありかたや進め方についてのことになってくると思うが。

事務局 活動方針の3にあたる、学校等における推進方策の検討をワーキングで実施していきたい。その可能性をアンケートで知りたいという意図。実際にモデル授業を実施するか、作業部会を実施するかというところまでは決めていない。可能性として想定されるものを組み込み、学校の意向を可能な範囲で把握していきたいということ。

座長 現時点で決まっていることではない。アンケート調査の結果次第ではということ。もしそういうことになれば協力いただけるのかという聞き方をしており、必ず実際に行うというものでもない。ただ、無理に作業部会という言葉を使わなくて良いのでは。それらを担当するグループという程度でも良いのではないか。希望を含めてということを立てた項目のようであるが、そういう形で残しても良いのか。それとも削ったほうがよいか。

委員 可能性の問題で答えるとすれば、学校の方も大変かと思うが。

座長 参加希望や将来的にといった、文言を整理してはいかがか。こちらの考え、希望、本気度を出すという意味で、アンケートに入れるということもありえると思うが。

委員 本気度というところで、そうしたこともありえるかもしれないが。

事務局 作業部会は使わず、聞き方のニュアンスを誤解を招かないように言葉を整理したい。

座長 今後、事務局にて検討いただくということでお任せしてよろしいか。

委員 4の部分は今後のニーズを図るという趣旨。どういうやり方がいいのかという聞き方もあるのでは。また、アンケートの目的と使い方について、資料1に記載のあるものと少しづれている。整理したほうが良い。

座長 目的を単純明快にしたほうがよい。使い方について、安心して答えるための使用目的を記述する必要がある。

事務局 目的の部分について、再検討させていただきたい。

座長 事務局に任せたいかがか。

委員 4 - 1、2の回答の仕方について、学校に配布したとして、回答者は教頭と想定される。組織として1番(参加)を選択することは考えられるであろうか。

委員 1から3は現状に対する質問ということで回答していけるかと思う。今後の意志を回答するところでは、次年度に向けて学校の意思をまとめていく大きなことになっていく。そうすると回答は難しくなっていく。

委員 回答は教頭となる。メンバーの参加となると難しいと考える。

座長 学校として受け取ってしまうので、回答者一任で答えるのは難しいということ。
4の項目はなかなか難しいか。現時点で、学校としての意思を記載できる範囲で
という立場でよいか。

事務局 学校の意味を集めていきたいということで項目立てしているが、他の良い記
載方法(聞き方)があれば、意見をいただくことは可能か。

座長 学校としてという回答は少数になるであろう。どんな聞き方があるか。

委員 作業部会などの言葉があるが、誰をどのように派遣するのか、勤務時間内外な
ど、学校としては、判断材料が必要になってくるであろう。位置づけが明確にな
ってから学校に声かけした方が適切な答えをいただけるのではないか。

委員 1は無理だと思うが、2と3に記載いただくということで良いのではないか。

座長 どの立場からということが問題になってくるので難しいであろうか。

事務局 そのような意向を聞きたいくらいのニュアンスとし、そうした聞き方でよい
か。

座長 そうした聞き方で。

事務局 それから先は個別の条件が出てくると思うので、今回は前向きな意向がある
かどうか程度に聞くということでいかがか。

座長 言葉を整理して、そうした聞き方でということでいかがか。受け取った学校が
不安に思わないように文言の整理を。

事務局 意見を参考に整理したい。

委員 ご関心を持たれるか、作った場合に参加されるか。あなた自身の考えを書いて
ください。という聞き方のアンケートがあったが、ご参考になれば、自分の考え
なのか組織の考えかというところが、この場での心配ごとか。

座長 学校としてなのか、個人としてなのかを悩まない文言で聞くほかない。そうし
た形に工夫してみるということでいかがか。時間も来たので、今後は、事務局で
検討して調査を実施するという事。スケジュールとしては、9月に配布、10
月に回収。それらを元に11月～12月に第2回のワーキング開催をと考えている。

委員 アンケートは未提出の学校に対して催促するのか。

事務局 回答状況をみながらとなる。催促という形ではなく依頼となる。回答がない
ところは関心がないということにもとれる。

座長 そうしたことで、進めていきたいかがか。(異議なし)

時間となったので、議事を終了させていただく。

その他

事務局 参加者の方から情報提供があれば。

(委員よりイベントの告知、事務局よりワンダグリンダニュース配信先募集等の案内)

事務局 次会の開催はアンケート結果が出る 11 月以降の開催となる。
以上をもって本日の行動計画WGを終了とする。

以上